



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4605 号 2018.9.11 発行

こども園に宅配ロッカー 夜間保育の保護者や職員に好評（千葉・松戸）



福祉新聞 2018年09月10日 編集部
保護者も職員も利用する宅配ロッカー

社会福祉法人さわらび福祉会（千葉県松戸市、和田泰彦理事長）が運営する「さわらびドリームこども園」に設置された宅配ロッカーが3日、供用開始した。同園は深夜0時まで児童を預かる夜間保育を行っており、日中宅配便を受け取れない保護者と勤務時間の遅い職員が利用することを想定している。保育所向け

の宅配ロッカー設置は日本初という。

宅配ロッカーの利用は無料で、全部で8個。配達先を園の住所に指定し、宅配ロッカーに届けてもらう。希望者には登録番号と暗証番号を配布し、それを使ってロッカーを開閉する仕組み。既に、保護者と職員合わせて約120人が利用登録を済ませており好評だ。

夜間保育を利用する保護者の多くは宅配便の配達時間（おおむね午前中～午後9時）に仕事で家を空けているため、受け取りが難しい。夜間勤務の園の職員も同様で、ともに毎日通う園に宅配ロッカーがあれば、手軽に宅配便を利用できることになる。

同園は、2014年4月に千葉県初の認可夜間保育所として開園し、今年4月に幼保連携型認定こども園に移行した。開園時間は午前7時から深夜0時まで。利用児童は47人おり、宅配便の配達が終わる午後9時以降の利用者は21人いる。

ロッカー設置前から、保護者が無料で利用できる自転車の空気入れを設置するなど、常に利用者目線でサービスを展開してきた経緯がある。三浦理恵園長は「保護者にとって便利なのはもちろんだが、職員の福利厚生という意味でも大いに貢献してくれるのでは」と期待を寄せた。

現在は荷物の受け取りだけだが、ニーズがあれば荷物の発送やクリーニングサービスなどもオプションで追加していく予定。

災害弱者の逃げ遅れ防ぐため、見守りの輪を 市民が奮闘 朝日新聞 2018年9月10日

3年前、避難に支援が必要な障害者や高齢者らの情報を把握しながらも、茨城県常総市や支援団体はうまく活用できなかったという。教訓を胸に刻み、市社会福祉協議会の横島智子さん（62）は仲間と防災ガイドブックを作成し、逃げ遅れを防ぐ網の目のような組織の構築に汗をかいている。

7月7日、常総市向石下の障害者施設。「障がい者の防災を考える連絡協議会」のメンバーでもある横島さんが、精神、知的、身体障害のある約25人に、ガイドブックを手で避難時の注意点を説いた。「薬の持参を忘れないで」「大雨の時は長靴を履くと水が入って歩

きにくいからやめましょう」などと語りかけた。
防災ガイドブックを用いて、障害者らに避難時の注意点を説明する横島智子さん＝茨城県常総市向石下

ガイドブックは横島さんと協議会の仲間らが市の協力を得て3月に作成した。障害ごとに異なる必要な支援の仕方を細かく記すとともに、障害者にも避難の際の心構えを説いている。

横島さんには苦い記憶がある。3年前の水害の際、社協は避難に支援が必要な人たちの情報を名簿で把握したが、活用は十分にできなかったという。

「近隣から声かけがなかった」「避難所までの交通手段がない」。2年前にまとめた障害者の避難の実態調査報告書には、支援者や障害者のそんな証言が載っている。作成に携わった横島さんは災害弱者の避難が置き去りにされていることを思い知った。

西日本豪雨では犠牲者の約7割が60代以上。災害弱者の避難がやはり課題となった。「3年前を上回る豪雨に直面したら、もっと高齢者や障害者の犠牲者が増えかねない」。そこで今年6月から複数の目で避難を支える組織「ほほえみネットワーク」の構築を民生委員と始めた。

災害弱者になる可能性がある高齢者や障害者の世帯を一軒ずつ訪問し、支援者の有無や避難場所を尋ねると、障害や要介護の程度だけでは把握できない課題が浮かんでくる。

同居する子どもがいても、災害弱者を背負って逃げるのは体力的に難しかったり、夜遅くまで不在だったりするケースもある。そんな人の避難を手助けするのが「ほほえみネットワーク」だ。連絡先を交換し合ったケアマネジャーや近所の住民など4、5人ずつで見守る。4世帯が加入した。

市防災危機管理課によると、避難時の支援が必要になりそうな要支援者は約3千人いる。市はそれぞれの事情に配慮した個別支援計画の作成に来年度から取り組む。見守り体制の構築は緒に就いたばかりだ。

同課は「行政機関だけで要支援者を支援するのは難しい。『ほほえみネットワーク』や自治区の近所づきあいなど、民間の力を借りて見守りの網を分厚くしたい」と話している。(鹿野幹男)



不安は取り除かず「あるがまま」に…心の病気に「森田療法」

読売新聞 2018年9月10日

東京都内の30歳代のA子さんは一昨年1月、かかりつけ医に「強迫性障害（強迫症）」と診断された。物に触ると気になって手を洗い、「仕事の書類を捨てたかも」とごみ箱を何度も確認してしまう。抗不安薬を飲んで改善せず、勤め先を退職したが、慈恵医大第三病院（東京都狛江市）で「森田療法」の外来治療を受けて改善、昨年夏に職場復帰した。（山口博弥）

森田療法は、慈恵医大の初代精神科教授、森田正馬が1919年に確立した精神療法で、来年で100年を迎える。

治療対象は、強迫症のほか、動悸や恐怖感に発作的に襲われるパニック症、人前で極度に緊張したりする社交不安症など、主に不安がベースにある心の病気だ。近年は、うつ病や心身症の治療にも用いられる。

森田療法の特徴は、不安を取り除こうとしないことにある。例えば、人前で緊張して不安になる人は、不安を「あってはならないもの」と考え、排除しようとする。しかし、意識すればするほど不安は膨らみ、さらに緊張してしまう——という悪循環に陥る。

森田療法では、不安は自然な感情として「あるがまま」にしておき、緊張してもいいから人前で話してみるよう指導する。そうして本来やるべきことを一つずつ達成するうちに、いつの間にか不安は小さくなっていく、と考える。

強迫症で布団から出られなかったが「行動のコツ」つかみ自信

強迫症のA子さんは休職中、慈恵医大第三病院にある森田療法センターに電車で通ったが、外出すると確認しなければならぬことが多くて疲れ果てた。ある診察日の朝、布団からどうしても出られず、担当の臨床心理士に「診察時間を遅らせて」と電話すると、こう指示を受けた。

「とりあえず布団から出ること。それから歯を磨き、服を着る。ダメなら、その時に考えましょう」

言われた通りにこなしていくと、電車に乗って時間通りに受診することができた。数か月後、自宅を引っ越すことになった。夫が仕事で不在の昼間、汚れへの不安を「あるがまま」にして荷造りを母親とこなし、無事引っ越しを終えた。

「行動するコツが分かると自信が付き、うれしかった。支えてくれた家族には本当に感謝しています」とA子さん。職場復帰した今、薬も飲んでいない。

同病院院長（精神神経科教授）で日本森田療法学会理事長の中村敬さんは「森田療法は、青少年から高齢者まで幅広く適用できる心の健康法でもあり、生きる力を育む指針です」と語る。今では「モリタ・セラピー」として、中国や北米、オーストラリア、ロシアでも治療が行われているという。

出産、育児…女性の悩みにも助言

今年7月、森田正馬の出身地の高知県で没後80年の墓前祭が開かれた。記念講演をした作家で精神科医の帯木蓬生さんは、森田の生涯を描く本を執筆中だ。

同じ7月には、森田療法を行う精神科医や臨床心理士の女性3人が著した「女性はなぜ生きづらいのか 森田療法で悩みや不安を解決する」（白揚社）も出版された。就職、出産、育児、夫の転勤、親の介護など、人生の節目で生き方の選択を迫られる女性の悩みについて、具体例を挙げて森田療法の考え方を生かした助言を紹介している。



障害者施設元職員、入所者暴行で無罪主張 大阪 産経新聞 2018年9月10日
大阪府和泉市の障害者支援施設「太平」で入所者の50代男性の顔を壁にぶつけてけがをさせたとして、傷害の罪に問われた元施設職員竹田涼被告（27）は10日、大阪地裁堺支部（三村三緒裁判長）で開かれた初公判で、「暴行しようとはしていない」と無罪を主張した。

検察側は冒頭陳述で、男性が暴れたり、他人に危害を加えたりするような様子はなかったとした上で、他の職員に近づいただけの男性の腕を引っ張り、勢いをつけて体を振り回したと指摘した。

弁護側は、男性がこれまでも突発的に施設内を走り回ることがあり、「他の職員から男性を離そうとした中で起きた事故だ」とし、傷害の故意はなかったと主張した。

起訴状によると、2016年8月26日、施設の通路で男性の腕をつかんで体を振り回し、顔を壁にぶつけて軽傷を負わせたとしている。

介護職員のストレス「事業所が責任を」 虐待防止へ集会 朝日新聞 2018年9月10日



集会では各施設の現状や実体験に基づいた意見が交わされた＝2018年8月30日午後7時43分、熊本県嘉島町上島

熊本市西区のグループホームで8月、入所者の女性が夜間に施設職員に暴行され死亡した事件を受けて、介護施設の管理者や職員ら約170人が同月30日、熊本県嘉島町に集まり、再発防止のために何ができるのか意見を交わした。

事件は8月7日深夜に発生。グループホームで当直勤務中だった職員の男（49）が、入所者の女性（当時88）の腹部を複数回殴って死なせたとして、傷害致死罪で起訴されている。

集会は、グループホームなどが加入する熊本県地域密着型サービス連絡会が開催。人吉市や天草市牛深町から勤務後に駆けつけた人もいた。

連絡会の川原秀夫会長は、今回の事件を「絶対に起こってはいけないこと」としながら、「偶発的な事件ではない。（職員にストレスの）サインが出ている時に対策をとっていれば起きなかった」と述べ、各施設に対し「いろんなストレスに対する解決策がとれているか」と問題提起した。

厚労省が3月に発表した調査結果では、16年度に全国の施設職員による高齢者への虐待とみなされた件数は452件、相談・通報件数は1723件と10年間で8～9倍に増加している。川原会長は、高齢化が進んで人員不足が深刻化する中で、現場の従業員が疲弊していると指摘。離職率も高く、1人あたりの仕事の負担が大きい中で、「自分が（虐待を）やってもおかしくなかった」と振り返る声もあがった。

特に夜勤中は、「一人で不安」「対応しきれずいららすることもある」といった意見も出た。グループホームは厚労省の通知や自治体の条例をもとに、夜勤中は1人で1ユニット9人を担当することも多い。中には「夜に誰かが来ると思うと安心する」と夜勤を2交代制にする工夫をする施設もあった。

甲佐町でグループホームを運営する高橋恵子さん（53）は、様々な声に「いらっとしない人間はいない。ストレスへの対応を変えるサポートが大切」と、管理者側からの教育の重要性を訴え、川原会長も「心身の健康を職員個人に任せるのではなく、事業所が責任を持つべきだ」と述べた。

集会後、いのちの電話の相談員の経験がある赤星文恵さん（64）は、介護職員の相談

ダイヤルがあればいいと話し、「人間関係から本音が言えない人もいる。誰かに共感され、話を聞いてもらえると明日も頑張ろうと思えるのでは」と指摘した。

県も今月19日に県内の介護施設を対象に研修を実施する予定で、高齢者虐待防止の模索が続く。(吉備彩日)

「車いすアイドル」猪狩ともか、笑顔で始球式に登場…彼女はなぜ、こんなに強いのか？

スポーツ報知 2018年9月10日

9日に行った始球式で笑顔を見せた仮面女子・猪狩ともか（後方は同ユニットの森下舞桜）



脊髄損傷で車いす生活になったアイドルグループ「仮面女子」の猪狩ともか（26）＝スチームガールズ＝が9日、自身が大ファンのプロ野球・西武の本拠地・メットライフドームでオリックス戦の始球式に登場。車いすに座りながら投球して見せた。

猪狩は今年4月、都内で倒れてきた看板の下敷きに。胸、腰などに大けがを負い、車いす生活になった。懸命のリハビリを乗り越え、8月26日に東京・秋葉原にある常設劇場「仮面女子C A F E」で一時復帰。同月31日には、オリックス―西武戦（京セラドーム大阪）の始球式に登場。投球こそしなかったが、マウンド横で笑顔を見せ、大きな拍手を浴びた。

仮面女子候補生から仮面女子に昇格した17年9月8日にも、メットライフドームでの始球式を経験。2年連続の登板となった。

8月31日の始球式ではオリックスの選手たちが激励の言葉を寄せ書きしたユニホームと帽子、さらに応援グッズをサプライズでプレゼントされ、9日も西武の選手から寄せ書きなど多くのサプライズ・プレゼントが贈られた。

今、多くの注目を集めている“いがとも”こと猪狩。もちろん、車いすのアイドルを応援しようという思いもあるのだが、猪狩自身に人を引きつける何かがあると、この4年、仮面女子を取材してきた私は思う。彼女が乗り越えてきた“もう一つの経験”にも強さの源があるのではないか。

2014年5月にアイドル研究生「スライムガールズ」としてステージデビュー。同年7月、オズの魔法使いをコンセプトにした上位ユニット「OZ」に昇格。ライオン担当になると、15年3月に「仮面女子候補生」が結成されリーダーとなった。当初は「すぐにも仮面女子に昇格する」と言われていたが、3回経験した組閣発表ではいずれも落選。しかし、17年1月、デビューから1004日で念願の仮面女子昇格をつかみ取った。

その間、多数の後輩が猪狩を追い越し、仮面女子に昇格していった。いったんは夢をあきらめ、芸能界引退も考えたが、「年齢を理由に“悲劇のヒロイン”に浸っていた自分を直し、何度でも挑戦し続ける」と心機一転。ついに遅咲きながらも夢をつかんだ。

昇格の1年後には、スチームガールズ（＝スチガ）のリーダーに抜てき。これまでもファンに見せつけてきた“いがとも”の「かならず夢を叶える。私の夢を叶える姿が、夢をあきらめている人たちの希望になれば」という力強い姿勢が人々を感動させ、笑顔にさせるのだろう。

昇格した際に私が行ったインタビューで「（3回も昇格できずに）投げ出しそうになったこともあったけど、ファンからの背中を押す声でもう一度立ち上がることができました」とファンに感謝した。リーダーでありながら“イジられ役”を率先して買って出るけなげさも、ファンやメンバー、スタッフから愛されてきた一因だ。

そういう過去の努力があるからこそ、車いす生活になりながらも、アイドルを続けると

決意したことに称賛の声が集まっているのだ。

仮面女子には、猪狩のほかにも「声帯結節」の手術を経験した東大アイドル・桜雪（25）＝アリス十番＝や、「斜視」を乗り越えたグラビアクィーン・神谷えりな（26）＝同＝、手話を得意とする雪乃しほり（27）＝スチームガールズ＝らがいる。

8月26日の復帰会見で、猪狩は「パラスポーツ（障がい者スポーツ）に挑戦したい」と宣言した。その際、まだ種目は決めていないことを明かしていたが、10月13日の開会式に出席する「福井しあわせ元気大会」（第18回全国障害者スポーツ大会：全スポ）で多くの種目に触れ、参考にすることだろう。

もともと海外での人気が高い仮面女子だけに2020年東京パラリンピックのアンバサダー就任を期待したい。新国立競技場での猪狩のひまわりのような笑顔、仮面女子の圧倒的なステージパフォーマンスを私は見てみたい。（記者コラム・松岡 岳大）

◆猪狩 ともか（いがり・ともか） 1991年12月9日、埼玉生まれ。26歳。154センチ、スリーサイズはB80（C）・W59・H88。最強の地下アイドル・仮面女子を構成する4ユニットの1つ「スチームガールズ」リーダー。2014年5月、研究生「スライムガールズ」としてステージデビュー。同年7月、オズの魔法使いをコンセプトとしたユニット「OZ」に昇格しライオンを担当。15年3月に「仮面女子候補生」が結成されリーダーに就任。17年1月8日に仮面女子・スチームガールズ（スチガ）への昇格が発表され、2月19日に加入式が行われた。スチガ加入1周年の18年2月に同ユニット・リーダーの就任が発表された。

【障害者雇用水増し】 原因究明へ検証委が初会合 産経新聞 2018年9月11日

中央省庁で障害者雇用水増しされていた問題の原因を究明するため、弁護士らで構成される第三者の検証委員会が11日、厚生労働省内で初会合を開く。関係府省庁の連絡会議の下に設置され、検証結果を基に連絡会議が10月中に再発防止策をまとめる。

検証委員会は5人で、委員長は弁護士で元福岡高検検事長の松井巖氏が務める。メンバーはほかに、前東京弁護士会会長の渚上玲子氏、元総務省行政評価局長の福井良次氏ら。不正算入がいつから始まったのかや、故意によるものか単純なミスなのかなどを調べる。

厚労省は8月、国の行政機関の8割に当たる27機関で、昨年雇用したとしていた計約6900人のうち、国のガイドラインに反し計3460人を不正に算入していたとの調査結果を公表している。

三木市の障害者雇用算定ミス 「職員数」に誤り 神戸新聞 2018年9月10日

三木市役所＝三木市上の丸町



兵庫県三木市は10日、障害者雇用率を算定する際、非常勤職員を含めなかったため分母の職員数を誤り、法定雇用率2・5%に達していなかったと発表した。現在雇用する障害者数は重度の4人を2倍で計算して「13人」だが、実際には「19人」が必要だった。

今年6月時点で分母の職員数は436人で雇用率2・98%と計算していたが、実際は漏れていた非正規職員345・5人分（30時間未満勤務は0・5人計算）を足した781・5人で、同1・66%だった。

計算時に分母となる「常時勤務する職員」について、同市は非常勤職員の任用期間を最長1年以内とし、継続時も新たな任用扱いとなるため対象外としていた。今月3日、兵庫労働局からの再点検の通知で、見込みを含めて「採用から1年を超えて勤務する者」と明

示されたため発覚した。

市の担当者は「適正な事務処理がされず、大変申し訳ない。雇用率達成に向けて計画を策定する」としている。(井川朋宏)

鹿島療育園秋祭り盛況



日本舞踊やひょっとこ踊りなど市内外の団体による出し物があり、利用者はカラオケで渾身（こんしん）の歌声を披露した。

迎雅瑠嗣施設長は「盛況でありがたい。利用者が楽しく生活できるよう、今後も地域がいっしょになって盛り上げてもらえれば」と話した。

佐賀新聞 2018年9月11日
恒例の秋祭りでのぎわった障害者支援施設「鹿島療育園」＝鹿島市

鹿島市山浦の障害者支援施設「鹿島療育園」で6日夜、恒例の秋祭りが開かれた。運動広場を会場に、ちょうちん飾りや出店、ステージが用意され、歌や踊りが披露された。涼しい秋の風を感じながら施設の利用者やその家族、地域住民や職員ら約450人がにぎやかなひとときを過ごした。

「鹿島一声浮立」で祭りがスタート。来場者が輪になって踊り歩き、車いすに乗った利用者も音頭に合わせて手を動かした。

暗闇歩き気付き得る 21美で来月「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」

中日新聞 2018年9月11日
ユニバーサルデザインいしかわが昨年開催した暗闇の中での茶会。「ダイアログ」ではさらに真っ暗な光のない中で、さまざまな体験をする＝金沢市内で（ユニバーサルデザインいしかわ提供）

視覚以外の感性磨く

真っ暗闇の中を歩き、視覚障害者に導かれながら視覚以外の感覚を研ぎ澄ませてさまざまなことを体験する「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」が、十月十八日から金沢市の金沢21世紀美術館で始まる。人と人との関わりや、心を通わせ合う大切さを知るエンターテインメントとして知られ、北陸では初開催となる。関係者は「多くの人に参加してもらい、人との関わり大切さに気付く機会にしてほしい」と呼び掛けている。(本安幸則)



「ダイアログ」は、日常生活のさまざまな環境を織り込んだ真っ暗な空間を、視覚以外の感覚を使って体験するワークショップ。ドイツの哲学者ハイネッケ博士が考案。これまで世界四十一カ国以上で開催され、八百万人以上が体験。日本には一九九九年に初めて紹介され、現在は企業研修などにも導入されている。

「暗闇の中では自分から声を出したりアクションを起こしたりしないと存在がなくなってしまう。互いに会話を重ね、気付きを得る体験となる」。今回の主催団体の一つ、一般社団法人「ユニバーサルデザインいしかわ」の安江雪菜専務理事は説明する。視覚を失い「日常的な暗闇」を経験している視覚障害者が案内役を務めることで、参加者にはさまざまな気付きを促すことができるという。

今回は「東アジア文化都市2018金沢」の市民連携特別事業で、「ダイアログ・イン・

ザ・ダーク ショーケース@金沢21世紀美術館」と題して開催。金沢らしく「工芸」をテーマに、茶道なども取り入れた独自のプログラムとなる。開催費用の一部はクラウドファンディングのウェブサイト「FAAVO（ファーブ）石川」で近日、出資の受け付けを始める。

開催期間は十月十八～二十八日（二十二日を除く）の十日間。一日八回（金土は十回、最終日は六回）、各回定員十人のグループで、約九十分かけて体験する。事前予約制で、九月十三日から申し込みを受け付ける。料金は三千五百円。（問）ユニバーサルデザインいしかわ事務局080（3317）5938

社説 企業は「心の病」対策を急げ

日本経済新聞 2018年9月11日

仕事の原因でうつ病などの精神疾患にかかり、労災認定を受けた人は、2017年度に過去最多を更新した。「心の病」の増加に歯止めがかかっていない。

働き手の健康がむしばまれている状況は放置できない。従業員の過度なストレスを取り除くなどの対策の徹底を求めたい。

厚生労働省によると、17年度の精神疾患の労災申請は1732人、認定は506人と、いずれも過去最多になった。申請は10年前の1.8倍となり、認定は初めて500人を超えた。

労災認定された人が精神疾患を発症した原因は「嫌がらせ、いじめ、暴行を受けた」が最も多く、「仕事内容、仕事量の変化」が続く。職場でのハラスメント（嫌がらせ）の広がりや過重労働が問題として浮かび上がる。

人材が力を発揮できないと企業の成長力も落ちる。安心して働ける職場環境が必要である。

まず求められるのは管理職や職場のリーダーの意識改革だ。パワーハラスメント（パワハラ）を起こす上司には総じて、部下は自分の言うことを聞いて当然だ、といった考えがみられる。

日本企業は従業員に対し雇用保障と引き換えに、上司の命令への服従を求めてきた面がある。その行き過ぎがハラスメントを生んでいるともいえる。個人の尊厳を重んじる組織への改革は経営者の責務だ。従業員の相談や社内通報を受ける窓口の開設は必須になる。定期的な研修も要るだろう。

長時間労働の是正も急がねばならない。総務省の調査によると、雇用されて働く人のうち週20時間以上の時間外労働をしている人は17年に7.7%いた。過労死を防ぐためにも企業は残業削減にいつそう知恵を絞るべきだ。

強いストレスを受ける職場で働き続けずに済むように、転職がしやすい流動性の高い労働市場の整備も重要だ。職業紹介などの規制の見直しが求められる。企業に、働き手から「選ばれる」ための改革を促す効果もあるだろう。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行